

支える手

親と子どもだけでなくできないことがある
2者を支える存在

—それは地域の手



ヘディング練習で1人1人にトスを上げて指導する石塚さん

71歳の指導者

「ふざけるなら、帰りなさい」
年配者が発する叱咤に子どもたちの元気な声が重なる。

ここは、当尾FC学童サッカークラブの練習場、当尾小学校。小学校の部活動が廃止された今年4月からこの光景が見られるようになった。
指導するのは、石塚秀敏さん71歳。松橋町で衣料品店を経営している。

サッカーは趣味。中学2年生

から始め、現在はサッカークラブLANZAKUMAMOTOに所属している。県内に2つしかない全員が70歳代のチームだ。今でも現役プレイヤーの彼が子どもたちの指導者になったのは、友人である保護者の親からお願い。日中仕事をしている監督が、指導できない時間に学童スポーツを見守る人が必要だった。

真剣に、そして繊細に

「時間もあるし。サッカーの

練習にもなります。教えるのも趣味みたいなものですね」
そう笑って話す。しかし、「練習には抜かりなく真剣に」これが石塚さんの教え。

「プレー中にふざける子、真剣さが足りない子は伸びません。だからちゃんと叱ります」
スポーツクラブとは違い、レベルの差があっても子どもたち全員を引き受ける学童クラブだからこそ、難しいことは多い。
「心を傷つけないように。例えうまくできなくても、傷つく

言葉は掛けません」
基礎練習を担う石塚さんは、子どもたちが全てのポジションに対応できるよう指導している。

地域で、現役であり続ける
「いつまで続けられるかわかりませんが、走れる限りサッカーを続けていきたいです」
と石塚さん。求められる限りは指導も続けたいという。
保護者が行き届かない部分を支える手として、地域にできることが確かにある。

石塚さんから
逆回転でボールを止めるトラップ
の仕方を教えてもらいました



1 技術は衰えません 2 1台のライトを借りて日没後も練習 3 8月、土砂降りの中、石塚さんのチームと対戦
4 当尾FCの仲間たち 5 店の衣服は自ら海外まで買い付けに行き、ポップも作る
6 全体練習時は遠くから子どもたちを見守る 7 デフェンスとオフェンスに分かれて対戦。負けた攻撃側が10回ダッシュ

感謝しかない

「強いチームを見らなん」
石塚さんから教わった言葉です。技術はもちろん、礼儀正しさを見習ってほしい。強いチームは控えもレギュラーのサポートをちゃんとしています。できる姿を見て覚え、学んでいくことが大事なんだと思います。
8月には石塚さんの所属チームと対戦。始まる前は70歳代との対戦で余裕の表情だった子どもたちも、圧倒的な技術力の差で負け、悔しそうな顔を見せていました。
指導者として見守ってくれる石塚さんには感謝しかありません。子どもたちには石塚さんから多くを学んでほしいです。



当尾FC代表
白石万理さん(44)